久成の釈尊との関係より見たる

菩薩行(その二)

問題の所在

解明することにあろう。 解明することにあろう。 解明することにあろう。 解明することにあろう。 解明することにあろう。 解明することにあろう。 解明することにあろう。 解明することにあろう。 解明することにあろう。

遠実成なりと明される所に特徴を有つ。

に収束され推求されるべきものである。しかも法華経での釈尊は久

係より観察して解析することであると、私は思う。 第一は菩薩行を久成の釈尊との通時的な因果と共時的な互具との関係より観察して解析することであり、第三は法師の体系との対比関係より観察して解析することであり、第三は法師の体系との対比関係。 の関係より観察して解析することであると、私は思う。

先ず第一の観点・方法より研究しよう。

久成の釈尊との関係より見たる菩薩行(その一)(伊藤)

ら見ても、法華経自体の内容動向から見ても、仏陀釈尊の行菩薩道およそ法華菩薩道の根本範型(モデル) は、仏教思想の行的基調か 瑞 叡

したがって久成釈尊の行菩薩道の形式・内容・構造、諸要素間の必然的関係を解明することこそ、先決問題でなければならない。
さて久成釈尊の行菩薩道については、如来寿量品の長行の中頃(®)に我本行菩薩道所」成寿命今猶未」尽(na ca tāvan me ... adyāpi paurvikī bodhisattva-caryā pariniṣpādit'āyuṣ-pramāṇam apy aparipūrṇam しかもわれは今なお過去の菩薩行によって成満された寿量をもまた満足していない)、対応重頌(®)に寿命無数劫久修」業所」得(āyuś ca me dirgham ananta-kalpam samupārjitam pūrva caritva caryām われの寿命は永く(2)

法華文化研究 (第十七号)

提起されうる。 wrviki bodhisattva-caryā, pūrva-caryā) とは何か、別言するならば、本地仏とその菩薩行との通時的な因果の関係は如何という問題が、本地仏とその菩薩行との通時的な因果の関係は如何という問題が、本地仏とその菩薩行との通時的な因果の関係は如何という問題が、

deśanā'bhinirhāra-nirmitāni) であると説かれる。 ⑩には六或説示が 正覚出世とか入於涅槃とか) は(本地仏たる常住不滅の釈迦如来の) 善巧 sattvāna 為」度,衆生,故)多くの菩薩を勧発し仏智に安住せしめる 説かれる。それは本地仏が自己を示現して (ātmôpadarśanena) 自己 方便たる説法を成就する (ための) 変現 (upāya-kauśalya-dharma-入脈仏道こ)ためであると知られる。しかも長行⑥には諸如来(の成 (samādāpemī bahu-bodhisattān bauddhasmi jñānasmi sthapemi ⟨₽_չ (sattvāna ... anekām paripācayāmī 教示化…衆生!) 調御し (vinayârtha とされる。 それは重頌(2・3)によると、 多くの衆生を成熟せしめ かしわれはその時には涅槃せず、実には今ここにおいて法を顕説する)する(4) (na câpi nirvāmy ahu tasmi kāle ihaiva co dharmu prakāśayāmi 🗅 は常時に法を説示する)し、 ③によると、 而実不…滅度」常住」此説、法 kālam この無上の菩提がわれによって得られてより以来……しかしてわれ (prāptā mayā eṣa tadā 'gra-bodhir dharmam ca deśemy ahu nitya-(=仏という存在)を所縁として (ātm'ārambaṇena) のみならず、 (=仏以外の存在者) を示現して (parôpadarśanena) 他者を所縁として また久成釈尊は、重頌の印によると、自己我得以仏来……常説」法

る。(a)(barārambaṇena) までも、一切の法門を説くということを示してい(barārambaṇena) までも、一切の法門を説くということを示してい

此)説法して衆生を成熟せしめ勧発して仏智に安住せしめると知ら他方で自己を示現(upadarśana)し他者を示現するなどして、常(住したがって久成釈尊は、一方で諸如来として変現 (nirmita) し、

れる。

具の関係は如何という問題が、提起されうる。いうには、久成釈尊の現在・未来における変現・示現として故に一つには、久成釈尊の現在・未来における変現・示現として

を解明して明晰・判明ならしめたい。関連を究明し、もって法華経における菩薩思想の理念と構造の範型的な因果の関係と共時的な互具の関係とを追求して両者相互の意味的な日果の関係と共時的な互具の関係とを追求して両者相互の意味

- (1) WT., p. 271, l. 16-p. 272, l. 2; Pk., 138a3-4. 正蔵九・四二c、一一三c。
- (2) WT., p. 277, l. 23-l. 24; Pk., 140b7. 正蔵・四三ゥ、一一五a。(3) WT., p. 275, l. 8-l. 9; Pk., 140a2. 正蔵・四三ゥ、一一四○。
- (4) WT., p. 275, l. 16-l. 17; Pk., 140a3. 同二°
- (5) WT., p. 275, l. 10-l. 17; Pk., 140a2-4. 正蔵・四三b、一一四
- (6) WT., p. 270, l. 9-l. 10; Pk., 137a5. 正蔵・四川 o、| | 三 o
- (7) WT., p. 270, l. 10-p. 271, l. 3; Pk., 137b2-5. 正蔵・四二c、一一三c。
- (8) 拙論 [Saddharma たる tathāgatāyuṣ-pramāṇa (如来寿量) の真義をめぐ

--通時的な因果の関係における因行-- 化城喩品 (=往古品) の行菩薩道

→問題の所在

gata, de bshin gśegs pa mnon par śes paḥi ye śes chen po) の三午塵 chos kyi ḥkhor lo...gsum du bzlas te rnam pa beu gñis su bskor ro srāḥ) と共に、大通智勝仏に勧請 (adhyeşanā) して四諦 (=三転十二 kumāra-bhūtāḥ) は、十方の諸梵天王 (brahma-koṭi-nayuta-śata-saha-因縁周をもって釈尊の本生譚が説示される。大通智勝如来の在家時 点劫の久遠における出世成道(いわゆる迹門の三千塵点の久遠成仏)の て釈迦牟尼仏として成仏すると説かれる。 て成仏する。そして十六菩薩沙弥の第十六の菩薩が娑婆国土におい なって、更に法華経の説法を聴聞して各々法華を覆講し十方に分れ 起の流転(・環滅 nivṛtti)を広説したもうた)を聴聞して出家し沙弥と cin hbrel bar hbyun ba la hjug pa yan rgyu cher rab tu ston to 縁 pratītyasamutpāda-pravṛttim ca vistareņa samprakāšayāmāsa, rten 三転十二行相の法輪を転じたもうた)・十二四縁の説法(広説十二因縁法 行法輪 dharma-cakraṃ pravartayāmāsa tri-parivartaṃ dvādaś'ākāram, における諸子 (putrāḥ) の十六王子なる 童真 (sodaśa rāja-kumārāḥ 化城喩品第七には大通智勝如来 (Mahā'bhijnā-jnānâbhibhū tathā-

薩道とは如何。それを問題として考察しよう。ての本行菩薩道と看做すことができるであろう。しからばその行菩をしたがって十六菩薩沙弥の行菩薩道をもって久成釈尊の因行とし

わち左の如くである。そのために先ず今品の長行の要文を摘出し分類して①ないし⑪とする。次に重頌を対照してみると、その内容は大約一致する。対応部する。そして便宜上、前述の十六王子出家前の内容をもって①とすす

- 華…に出家而、正法華に以家信出家為道)、 九十二五名、九一c。 ste 已曾供ī毒。 medhāvinaḥ kuśalāḥ; ḥdsaṅs śiṅ gsal la yid rno shiṅ mkhas te 諸根通 tshul pha 沙弥) となり、 vrajitāḥ; ... dad de khyim nas khyim med par rab tu byun nas 妙法 もって家を去って出家者となり(...śraddhayā 'gārād anāgārikāṃ pra= 仏。造n立修行。求n無上正真道1)。WT., P. 161, 1. 5-1. 9; Pk., 79a5-7. 正蔵 cânuttarāyāh samyak-sambodheh; \sim la spyad pa \sim don du gñer pa 無上正等覚を志願した (bahu-buddha-śata-sahasra-caritāvino 'rthinas 利智慧明了、聡明智慧多有…方便ごにして、多百千の仏のもとで行を修め 2 かれら十六の王子なる童真は実に同じく信(妙法華に欠く)を 百千万億諸仏。浄π修梵行。志ṇ阿〇提、為曾供π養億百千 賢能・明晰・聡敏・善巧 (paṇḍitā vyaktā みな沙弥 (śrāmaṇerāḥ; dge
- …かれら十六の沙弥は…かくの如く言った。「…如来応供正

3

等覚者はわれらを哀愍する故に無上正等覚に関して法を説きたまえ (... anukampām upādāyānuttarāṃ samyak-saṃbodhim ārabhya dhar=maṃ deśayati; ... thugs brtse baḥi slad du bla na med pa ~ las brt=sams te chos bstan du gsol. ...説□□○提法、…請π演無上正真道誼₁)。 そうすれば、われらもまた如来に随って修学するだろう (tathāga=tasyānuśkṣemahi 我等聞已。皆共修学)。世尊よ、われらは如来の智見を志願するものである (arthino vayaṃ ... tathāgata-jnāna-darśanena; ~ ye śes bdag cag mthon bar ḥtshal lo 我等志¬願如来知見、願□弘慧見□)。 世尊は実にわれらに、この義について現証するもの (asmin evārthe sākṣin; don ḥdi la ... mňon sum ste) である。…なんじは一切の衆生の意楽を知るものであり、われらの深心を知りたもう (jānīṣe 'smākam adhyāśayam; bdag cag gi bsam pa yaṅ mkhyen to 深心所」。 《公自証知》」と。 WT., p. 161, t. 9-t. 19; Pk., 79b-13.

④ かの…正等覚者はかれら沙弥の深心を知って (~ adhyāśayaṃ viditvā; gsol pa btab pa mkhyen ste 受::~請、観::諸沙門心之本源:)…かの一切の四衆のために菩薩への教授にして諸仏の摂持するものである大乗経の妙法蓮華と名ける法門を広く顕説したもうた(Saddha=rmapuṇḍarīkaṃ~sarva-buddha-parigrahaṃ vistareṇa saṃprakāśayā=māsa;~rgya cher rab tu bstan to 説::大乗経~仏所護念、説::正法方等 māsa;~rgya cher rab tu bstan to 説::大乗経~仏所護念、説::正法方等

⑤ …その時、十六王子たる沙弥はかの世尊の所説を摂受し保持

し取得し証得した(bhagavato bhāṣitaṃ...udgṛhitavanto dhāritavantaārādhitavantaḥ paryāptavantaḥ; ∼ bśad...blaṅs so//bzuṅ ṅo/kun chub par byas so 皆共受持諷誦通利、聞≒仏所説;悉共受持。諷誦講演)。WT., p. 161, t. 30-p. 162, t. 2; Pk., 79b7. 正蔵・二五b、九一c。

したもうた (vyākarṣīd anuttarāyāṃ samyak-saṃbuddhau; ~tu

…かの正等覚者は無上正等覚においてかれら十六沙弥に授記

6

® …かれら十六沙弥は…如来が静思したのを知って、各々法座として師子座を施設してそれらに坐し…如来に南無して (tathāgat=am namas-kṛtya チベット・シナ訳ともに欠く)、この妙法蓮華の法門を八万四千劫の間、四衆のために広説した (… vistareṇa~saṃprakā=śitavantaḥ; ~rgya cher rab tu bstan to 於□八万四千劫。為□四部衆。広π説分□別。炒○経、欲→用□敷演□広彼法誼。於□時都会八万四千劫,分別説→広π説分□別。炒○経、欲→用□敷演□広彼法誼。於□時都会八万四千劫,分別説→広π説分□別。少○経、欲→上・シナ訳ともに欠く)、この妙法蓮華の法門を加入の対したのを知って、各々法座として師子座を施設しての対したのを知って、各々法座として師子座を加入の対したのを知って、各々法座として師子座を加入の対したのを知って、各々法座として師子座を加入の対したのを知って、各々法座として師子座を加入の対したのを知って、各々法座として師子座を加入の対したので知って、各々法座として師子座を加入の対したのが対しませていた。

い百千億那由他の生類を無上正等覚において成熟し勧発し勇悦せしめ教励し勧喜せしめ趣入せしめた (tatra...ekâìkaḥ śrāmaṇero bodhi=sattvaḥ ṣaṣṭi-ṣaṣṭi-Gaṅgā-nadī-vālukā-samāni prāṇi-koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇy anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhaup aripācitavān samādāpi=tavān saṃharṣitavān samuttejitavān saṃpraharṣitavān avatāritavān; de na... dge tshul byaṅ chub sems dpaḥ re res kyaṅ slog chags ~ la yaṅ dag par bstan te/yaṅ dag par gzeṅ bstod/yaṅ dag par rab tu dgaḥ bar byas/yaṅ dag par rdsogs paḥi byaṅ chub tu yoṅs su smin par byas so// ~教示し教励し勧喜せしめ勧発し趣入せしめて無上正等覚において成熟せしめた。一一皆度≒六百万億那由他恒河沙等衆生;示教利喜令ゝ発;「下表」)。Wī, p. 162, 1. 15-p. 163, 1. 2; Pk., 80a3-8. 荻原本一六三頁脚注参照。

9 …かの世尊は…比丘衆に告げて言われた。「これら十六の沙いる者の、仏智に趣入するものであり仏智に近侍するもの、仏智に趣入するものであり仏智に近侍するもの、仏智を受持するもの、仏智に趣入するもの、仏智を顕示するものである(āśca-rya-prāptā bhikṣavo 'dbhuta-prāptā ine ṣoḍaśa śrāmaṇerāḥ prajñāvan-to bahu-buddha-koṭi-nayuta-śata-sahasra-paryupāsitāś cīːṇa-caritā bu-ddha-jñāna-paryupāsikā buddha-jñāna-pratigrāhakā buddha-jñānâva-tārakā buddha-jñāna-saṃdarśakāḥ; dge tshul bcu drug po ḥdi dag no mtshar du gyur pa rmad du gyur pa śes rab dan ldan pa ~ la bsñen 久成の釈尊との関係より見たる菩薩行(その一)(伊藤)

dag thams cad myur du bla na med pa yan dag par rdsogs paḥi 及無量。 gyis // 甚為;ī希有; 諸根通利。智慧明了。已曾供ī養。 1.9-1.20; Pk., 80a8-80b7. 正蔵·二五b、 聴:所」說経:不:拒逆:者。 得言声聞縁覚之路。若行言藍及成就者。 byan chub thob par hgyur ro// \sim de j
ñānam anuprāpsyanti; \sim chos b
śad pa la mi spod mi smon pa de na pratiksepsyanti na pratibādhisyante sarve te ksipram anuttarāyānikā vā bodhisattva-yānikā válsām kula-putrāņām dharma-desanām ḥdsin du ḥdsud pa saṅs rgyas kyi ye śes yaṅ dag par ston pa bkur byas pa śin tu spyod pa spyad pa sańs rgyas 不少毀者。 par hgyur ro // 若声聞辟支仏及諸菩薩。能信;;是十六菩薩所説経法。受持 yāḥ samyak-saṃbodher lābhino bhavisyanti sarve ca te tathāgata-聖慧。入二子道明1合可集仏智心…声聞乗のものにせよ独覚乗のものにせ 於言諸仏所。常修見行。受司持仏智。開司示衆生。令入司其中、所文建功徳難 随得するであろう (ye ke-cid... śrāvaka-yānikā vā のは、すべてみな速やかに無上正等覚を得るものとなり、 よ、これらの善男子の説法を誹謗せず毀壊しないだろうところのも 至二未曾有智慧巍巍。 是人皆当」得阿耨多羅三藐三菩提如来之慧、其志、声聞縁覚乗。已 皆当」逮示得無上正真之道成仏聖慧」)。 則以」供用養無数億百千諸仏。 其新発意皆当」付」此。諸族姓子。 bshin gśegs 無量千万億数諸仏。 pratyekabuddha. paḥi ye śes thob 衆行具足普受力 kyi WT., p. 163 如来智を pa yin

華の法門を何度も顕説したのである。六十・六十の恒河沙に等しい⑩ 「かれら十六の善男子はかの世尊の教において、この妙法蓮

4; Pk., 80b7-81a2 是正法1数数分別為11一切1説。 dag par gcud par gyur te \sim de dag la lta shin de dag la chos ñan 河沙等衆生。世世所」生与:言薩!俱。 to // ... 是十六菩薩常楽說; 是妙法蓮華経。 一一菩薩所化六百万億那由他恒 tu bstan to // ... ~ de dag re res kyań sems can ~ byań chub tu yań chos padma dkar poḥi chos kyi rnam grans ḥdi yan dan yan du rab dharmam aśrauşuḥ / ; ... \sim bcom ldan ḥdas deḥi bstan pa la dam paḥi jātisv anupravrajitāni tāny eva samanupasyantas tesām evântikād samādāpitāny abhūvan sarvāņi ca tāni tair eva sārdhaṃ tāsu-tāsu Gaṅgā-nadī-vālukā-samāni sattva-koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇi bodhāya sattvair yāni tāny ekaikena bodhisattvena mahāsattvena şaṣṭi-ṣaṣṭimprakāšito 'bhūt / taiḥ ... ṣoḍaśabhiḥ śrāmaṇerair bodhisattvair mahāśāsane 'yam Saddharmapuṇḍarīko dharma-paryāyaḥ punaḥ-punaḥ sa= 人。所生之処常共俱会。 聞したのである (taih ... soḍaśabhih kula-putrais れぞれの生において出家し、かれらに随観して、かれらより法を聴 薩によって菩提へと勧発せしめられ、かれらはみなかれらと共にそ 百千億那由他の衆生は、これら十六の沙弥なる菩薩のこの菩薩摩訶 亦復普説聴:正法誼:)。 其十六子具,,菩薩乗。一一開,,化六十江河沙等 從、其聞、法悉皆信解、 WT., p. 163, l. 21-p. 164, l. tasya bhagavataḥ 順山世尊教。以山

今に存住し保持し経験し、十方の種々の仏国土において多百千億那なる法師となった。かれらはみな無上正等覚を現等覚し、しかしての …かれら十六の王子なる童真は、かの世尊の教において沙弥

paḥi byaṅ chub mion par rdsogs par saṅs rgyas so // 第十六我釈迦牟 声聞。 paḥi sans rgyas śākya thub pa de ni bcu drug pa ste//dbus kyi ḥjig nāma tathāgato 'rhan samyak-saṃbuddhaḥ soḍaśamo madhye khalv 成11如来至真等正覚。合11十六尊1)。 尼仏。於11娑婆国土。成11阿耨多羅三藐三菩提、今吾能仁。於11忍世界。得2 rten gyi khams mi mjed ḥdir/bla na med pa yan dag par rdsogs buddhaḥ//; de bshin gśegs pa dgra bcom pa yan dag par rdsogs asyām sahāyām loka-dhātāv anuttarām samyak-sambodhim abhisam= dge tshul chos smra bar gyur pa ~ chos ston to // 彼仏弟子十六沙弥。 srāṇāṃ dharmaṃ deśayanti/; ... bcom ldan ḥdas deḥi bstan pa la 上正等覚を現等覚したのである ('haṃ ca bhikṣavaḥ Sākya-munir 如来応供正等覚者が、まさに中央におけるこの娑婆世界において無 無数億百千核兆載声聞衆一)。 今皆得,,阿耨多羅三藐三菩提。於,,十方国土。現在說,太若,,無量百千万億菩薩 buddha-kṣetreṣu bahūnāṃ śrāvaka-bodhisattva-koṭī-nayuta-śata-saha= rve ca ta etarhi tişihanti dhriyante yapayanti dasasu dikşu nanaabhūvan sarve te 'nuttarām samyak-sambodhim abhisambuddhāh sa= kumārabhūtā ye tasya bhagavataḥ śāsane śrāmaṇerā dharma-bhāṇakā 165, 1. 2; Pk., 81a2-81b7. 正蔵・二五bc、九二ab 由他の声聞・菩薩に法を説くのである 以為:1眷属、今皆成:1無上正真之道。今悉現在処:1于十方1説、法教:1護。 …低われ第十六番目の釈迦牟尼と名ける WT., p. 164, l. 6-WT., p. 164, l. 29 (ye te sodasa rāja-kumārāḥ

⑫ また諸比丘よ、その時、およそ衆生なるものは沙弥であった

gnas te / \sim yons su smin par byed de / bla na med pa yan dag evávasthitāni paripācyanta evânuttarāyām samyak-sambodhau / eṣal= sattvā dharmam śrutavantas tasya bhagavatah śāsana ekâlkasya rim ni de ltaḥo // 諸比丘。我等為;;沙弥;時。各各教;ī化無量百千万億恒河 chub la yan dag par b
stud pa de dag \sim da dun ñan thos kyi sa na váiṣām ānupūrvy anuttarāyāḥ samyak-saṃbodher abhisaṃbodhanāya rāyām samyak-sambodhau tāny etāni bhikṣavo 'dyâpi śrāvaka-bhūmāv ttva-koțī-nayuta-śata-sahasrāṇi yāny asmābhiḥ samādāpitāny anutta= bodhisattvasya mahāsattvasya bahūni Gaṅgā-nadī-vālukā-samāni sa= 第である (ye punas te bhikṣavas tadā 'smākaṃ śrāmaṇera-bhūtānāṃ られる。これがかれらをして無上正等覚を現等覚せしめるための次 摩訶薩には恒河沙に等しい多百千億那由他の衆生であった。かれら によって無上正等覚に勧発せしめられたのは、(われら)一一の菩薩 われらより法を聴聞したのであり、 菩薩開,1化無量諸江河沙億百千姟。発,無上正真道,者。 今得、成,就為菩薩道, 又告:比丘。吾等十六為:沙弥:時。 地1者4、我当教刊化阿耨多羅三藐三菩提1。是諸人等。 応斥以1是法1漸入+仏道4 沙等衆生。從」我聞法為,阿耨多羅三藐三菩提。此諸衆生。于今有斥住,声聞 rdsogs paḥi byaṅ chub mion par rdsogs par ḥtshaṅ rgya baḥi / ; \sim ṅed kyis so sor bla na med pa yaṅ dag par rdsogs paḥi byaṅ 諸比丘よ、今もまた声聞地に住するも無上正等覚に成熟せしめ 漸当」誘⊓進無上大道。 在11彼仏世1講刊說経法1。衆生聴受。一一 稍稍当、成;最正覚;)。WT., p. 165, t. かの世尊の教において、われら par go

3-1.9; Pk., 81b7-82a2. 正蔵・二五b、九二b。

she na // ~ 所以者何。如来智慧難」信難、解。爾時所」化無量恒河沙等衆生 thams cad mkhyen paḥi chos thos par bya baḥi sems can de dag gan mayena sattvā abhūvan //; \sim de bshin g
segs paḥi ye ses mos par Gangā-nadī-vālukā-samāni sattva-koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇi sarva-jña-開而化無量億百千姟江河沙等。聽而聞諮而受諸通慧一者。当来末世。或有此発意。 者。汝等諸比丘及我滅度後未来世中声聞弟子是也、所以者何。 dkah bahi phyir ro $//\sim$ bcom ldan hdas dehi bstanpa la \sim gan dag tā-dharmam anuśrāvitāni / yūyam te bhikṣavas tena kālena tena sakṣavas tathāgata-jñānam / katame ca te bhikṣavaḥ sattvā ye mayā なるところの衆生とは誰か。なんじ等がその時、その場で、その衆 切智性の法を随聞せしめた無量無数の恒河沙に等しい百千億那由他 である。また諸比丘よ、われが菩薩としてかの釈尊の教において一 限難」計。不」可言逮及為」若」此也、又告言比丘。何所是乎。 吾為言薩言時。 bodhisattvena tasya bhagavatah śāsane aprameyāny asamkhyeyāni 生だったのである (tat kasya hetoḥ/evaṃ duradhimccyaṃ hi bhi= 学弟子乗。成為:"声聞:)。WT., p. 165, t. 9-1. 14; Pk., 82a2-4 13 何故かというに、かくの如く如来智は信解し難いものだから 如来之慧難.

般涅槃の想念をいだいて般涅槃するであろう。しかしまた諸比丘よ、らは菩薩である』とは随覚しない。しかも諸比丘よ、かれらはみなるものがあって、菩薩行を聴聞するであろうが、(かれらは)』われる。またわれが般涅槃(=滅度)した未来世においても諸の声聞な

久成の釈尊との関係より見たる菩薩行(その一)(伊藤)

得」聞言是経了 不、解,仏慧,不、行,菩薩。一切志在,無為之想。謂当,滅度。 甫当、往,至他仏 知:不」覚言菩薩所行。自於:所得功徳;生:滅度想。当」入:涅槃。我於:余国:作 bya ba ni ñan par hgyur ro // 我滅度後。 gud na mya nan las ḥdaḥ ba gñis su gshan med do shes de lta buḥi pa rnams kyi yons su mya nan las ḥdas pa ḥdi gcig bu ste/ḥdi las pahi ye śes tshol shin skye bar hgyur ro // de na yan de bshin gśegs na min gshan dan gshan dag gis gnas der de dag de bshin gsegs yin par mi ses pas / \sim ḥon kyaṅ ḥjig rten gyi khams gshan dag na / chub sems dpaḥi spyod pa ñan yaṅ bdag cag byaṅ chub sems dpaḥ rvāṇaṃ nâsty anyad dvitīyam ito bahir nirvāṇaṃ / ; \sim de dag // byaṅ te punar eváltām kriyām śrosyanti/ekam eva tathāgatānām pariniyad aham anyāsu loka-dhātuṣv anyonyair nāmadheyair viharāmi ta= parinirvāņa-samjāinah parinirvāsyanti/api tu khalu punar bhikṣavo câvabhotsyante bodhisattvā vayam iti / kim câpi te bhikṣavaḥ sarve gate 'dhvani śrāvakā bhavişyanti bodhisattva-caryām ca śrosyanti na tra te punar utpatsyante tathāgata-jñānam paryeṣamāṇās tatra ca われは諸他の世界に種々の名称をもって遊行するが、そこにおいて より外に第二の涅槃は存在しないと (ye ca mama parinirvṛtasyânā-この所作を聴聞するであろう。諸如来の般涅槃は唯一であり、これ かれらもまた受生して如来智を希求し、そこにおいてかれらもまた 更有11異名。是人雖上生11減度之想1入量於涅槃4。而於11彼土1求11仏智慧6 唯以,,仏乗,而得,滅度。更無,余乗、後不,肯,聴,受菩薩之教。 復有:1弟子:不」聞:1是経。不」

世界,順"殊異行,生"異仏国"。当"求"道慧,志聴啓受。爾乃解"知如来之法"で、九二b。

すること)が諸如来の善巧方便であると知るべきである(tathāgatā-

諸比丘よ、その説法を成就する (ための) もの (=三乗を顕説

(15)

pa 辦。 la ñe bar gyur ltos śig / rtogs śig // gan khyed kyi mya nan las ḥdas yuşmākam nirvāṇam naiva nirvāṇam /; \sim khyed bya ba byas pa tathāgata-jñānam vyavalokayadhvam bhiksavo vyavacārayadhvam yad karaņīyāḥ/api tu khalu punar bhikṣavo yuṣmākam abhyāśa itas samsrāvayati/na khalu punar bhikṣavo yūyam kṛta-kṛtyāḥ kṛta-てまた諸比丘よ、なんじらは所作を弁ぜず所作事を弁ぜず。しかも 涅槃は実には涅槃ではない (atha khalu bhikṣavas tathāgato 'py evaṃ これよりなんじらは如来智を観察し、これを伺察せよ。なんじらの また諸比丘よ、なんじらは(如来智に)近接している。諸比丘よ、 説法、皆是如来善権方便説。三乗,耳)。WT., p. 165, l. 22-l. 23; Pk., 82a8. gśegs pa rnams kyi thabs mkhas par rig par bya ste / 除n諸如来方便 nirhāras ca/; \sim chos bstan mnon par bsgrub pa de ni/de bshin nām etad bhīkṣava upāya-kauśalyam veditavyam dharma-deśanā'bhi 16 mya nan las ḥdas pa ma yin te/ 汝所住地近11於仏慧。当11観察籌量。 所得涅槃。 yin te byed pa byas pa ma yin la \sim de bshin gsegs pahi ye その時、諸比丘よ、如来はまたかくの如く聴聞せしめる。「さ 如来爾時即便為說。 非11真実1也、正法華は不

明瞭)。WT., p. 167, l. 13-l. 17; Pk., 83b4-6.

⑪ しかもまた諸比丘よ、この三乗を顕説すること、それは諸如来応俱正等覚者の善巧方便である」と(api tu khalu punar upāya-kauśalyam etad bhikṣavas tathāgatānām arhatām samyak-sambud=dhānām yat trīṇi yānāni saṃprakāśayantiti/; ~ gaṅ theg pa gsum du bśad pa ni de bshin gśegs pa ~ rnams kyi thabs mkhas paḥo shes ~ 但是如来方便之力。於二仏乘;分別説」三、正法華は不明瞭)。WT., p. 167, 17-1. 19; Pk., 8366-7.

(W) そのときかの人師の子にして徳高き勇者なる十六王子は (vī-rāḥ kumārā atha tasya sodaśa, putrā guṇ'ādhyā nara-nāyakasya/; yon tan phyug pa mi gtsod yi sras//gshon nur gyur pa dpaḥ bo bcu drug rnams// 彼仏十六子、諸子十六)…WT., p. 168, 1. 10-1. 11; Pk., 84a2-3. 正蔵・二六b、九三。。

側 …法を顕説せよと勧請した (adhyeṣiṣū dharma prakāśayasva; chos rab tu bstan du gsol shes gsol ba btab 而請」転言法輪,願」説言経典」)…WT., p. 168, l. 15; Pk., 84a4.

図 無辺眼者はこの勧請を知って多種に法を顕説したもう。四諦を広く、またこの一切の存在は縁りて起れるものである(と顕説したもう)。(adhyeṣaṇāṃ jñātva ananta-cakṣuḥ, prakāṣate dharma bahu-prakāram/catvāri satyāni ca vistareṇa, pratītya sarve imi bhāva utthitāḥ //73//; gsol ba mthaḥ yas sbyan gyis mkhyen nas ni//rnam pa maṅ por chos rnams rab bstan pa//bden pa bshi

久成の釈尊との関係より見たる菩薩行(その一)(伊藤)

仏為説 byuń // 84b3-4. 正蔵·二六b、九三b、 老死」皆從二生縁一有、 rnams rab tu brgyas pa dan // dnons po hdi dag thams cad rten nas 遍示示四語1 無量慧世尊 一切具解言 受前彼衆人請 普等法眼 十二因緣1) WT., p. 169, l. 18-l. 21; Pk. 分刊別惷誼1 宣刊揚群典 為宣,種種法 四諦十二縁; 無明至 若干品類1 時

la dge tshul de dag gsol // 時十六王子 出家作:1沙弥1 蔵·二六c、九三b。 為1沙弥1 而悉分7別 演司説大乗法门 bu // hdren pa khyod kyis chos mchog bstan gsol shes // rgyal ba msu tam jinam, prakāśayā nāyaka agra-dharmam //78//; rgyal bu daśa rāja-putrā, ye orasā cailaka-bhūta sarve/te śrāmaņerā avaci= 勝者に、導師よ、無上の法を顕説したまえと請う (ye câpi te sobcu drug po ni de dag kyan // thams cad gshon nur gyur pa sñin gi (78) 実子なるかれら十六王子もみな出家し、 於」時至尊 仏方等経1)。WT., p. 170, t. 13-t. 17; Pk., 84b7-8. 十六聖子 等俱学者 斉共同心 沙弥となって、 皆共請言彼仏 一切出家 咸

(8) かの勝者は自生たるかれら王子の意楽を知って、多億那由他の譬喩をもって最上なる無上の菩提を説きたもう (so cā jino āśayu jñātva teṣāṃ, kumāra-bhūtāna tath'ātmajānām / prakāśayī uttamam agra-bodhiṃ, dṛṣṭānta-koṭī-nayutair anekaiḥ // 80 //; de sres gshon nur gyur pa de dag gi // bsam dag ni rgyal ba des mkhyen pas // dpe rnams bye ba khrag khrig du ma yis // byan chub dam pa mchog ni rab tu bstan // 仏知n童子心 宿世之所行, 以n無量因縁 種種諸譬

法華文化研究 (第十七号)

上尊道 億百千姟 無底譬喩·)。WT., 170, t. 21-t. 24. Pk. 85a1.

(3) 千の因をもって顕示し神通智を発揮して、世主は賢明なる菩薩が行ずるために真実の行を示したもう(hetū-sahasrair upadarśa-yanto, abhijña-jñānaṃ ca pravartayantaḥ/bhūtāṃ cariṃ darśayi loka-nātho, yathā caranto vidu-bodhisattvāḥ//81//; rgyu ni maṅ po stoṅ gis ñer bstan te//moṅ par śes daṅ ye śes rab tu bsgrags//byaṅ chub sems dpaḥ mkhas pa spyod pa bshin//ḥjig rten mgon pos yaṅ dag spyod pa bstan// 説ṇ六波羅蜜 及諸神通事, 分ਜ別真実法菩薩所行道、示ਜ現因縁, 尋n獲報応, 分ਜ別所」與 諸通敏慧, 如言菩薩所行道、示市現因緣, 尋n獲報応, 分市別所」與 諸通敏慧, 如言菩薩所行道、示市現因緣, 尋n獲報応, 分市別所」與 諸通敏慧, 如言菩薩, 所」当言行, 於」時大聖 為現ṇ真語,)。WT., p. 170, t. 25-p. 171, t. 2; Pk., 85a1-2.

図 世尊は恒河沙の量の如き多千の偈頌をもって大方等経なる、この妙法蓮華を説きたもう (idam eva Saddharmasupuṇḍarīkaṃ, vai-pulya-sūtraṃ bhagavān uvāca / gāthā-sahasrehi analpakehi, yeṣāṃ pramāṇaṃ yatha Gaṅga-vālikāḥ //82//; gaṅ dag tshad ni gaṅ gāḥi bye sñed kyi // tshigs sa bcad pa stoṅ phrag mi ñuṅ bar // rab rgyas mdo sde dam chos padma dkar // ḥdi nid bcom ldan ḥdas kyis rab tu bśad // 説。是法華経 如ṇ恒河沙ṇ偈、顕ṇ揚宣ṇ布 斯正法華 普雨講示 大方等経 若干千頌 不」可识思念 無」能嗚限量 如申江河沙山)。WT., p. 171, t. 3-t. 6; Pk., 85a3.

窓 そのときかの善逝のこの子は、恒河沙の如き無量なる六十千

に聞かしめ、無数の衆生を引導した (Gaṅgā yathā vāluka aprameyā, sahasra-ṣaṣṭiṃ tada śrāvayiṃsu / ekâiku tasyo sugatasya putro, vineti sattvāni analpakāni //86//; ~ la bsgrags // sems can mthaḥ yas pa dag rnam par hdul // 一沙弥等 所」度諸衆生 有言六百億 恒河沙等衆 安住之子 一一開ョ導 算諸黎庶 無」能『限量』)。 WT., p. 171, t. 19-t. 22; Pk., 85a6-7.

88 かの勝者のかれら十六子は、広大・殊勝なる行を行じて、十方に成仏して、 ふたりづつ諸方にて勝者となった (caritva caryāṃ vipulāṃ viśiṣṭāṃ, buddhvā ca te bodhi daśa-ddiśāsu/te ṣoḍaśā tasya jinasya putrā, diśāsu sarvāsu dvayo dvayo jināḥ//88//; spyod pa yaṅs pa khyad par ḥphags spyod nas// ~ 是十六沙弥 具足行"仏道! 今現在"十方! 各得」成"正覚「適聞"斯名! 便即供n養 両足之尊! 有"四 今現在"十方! 各得」成"正覚「適聞"斯名! 便即供n養 両足之尊! 有"四 条5a8.

卿 われもまたかれら(十六王子)の中にいたのであり、なんじらはみなわれより聴聞したのである。 それ故になんじらすべてを菩提に導くのである(aham pi abhyantari teşa āsīn, mayā 'pi saṃśrāvita sarvi yūyam / teno mama śrāvaka yūyam adya, bodhāv upāyen' iha sarvi nemi // 90 //; ~ da duṅ ṅa yi ñan thos khyad // byaṅ chub ḥdi la thams cad thabs kyis bkris // 我在山十六数」 曾亦為」汝説 是故以山方便, 引」汝趣,仏慧; 吾身爾時 寤不」覚者 皆令山一切 咸得,聴受, 爾万便, 引」汝趣,仏慧; 吾身爾時 寤不」覚者 皆令山一切 咸得,聴受, 爾

号:声聞子 善権方便 示:諸人道;)。WT., p. 172, l. 9-l. 12; Pk.,

本因縁,今説,法華経,令,,汝入,,仏道,慎勿、懷,,驚懼、吾前世時 ḥchad cin // gan phyir byan chub mchog ḥdi nas bkri ba // ~ 以w起 bodhim, mā bhikṣavo uttrasathēha sthāne $//91//;\sim$ na ni chos am pratyayo yena hu dharma bhāṣe / nayāmy aham yena mamâgra= このことわりを懼れるなかれ (ayam khu hetus tada pūrva āsīd, ay= は法を説き、それ故にわれはわれの無上の菩提に導く、比丘等よ、 172, l. 13-l. 16; Pk., 85b3 (91) 応、所、説、法 そのとき過去にこの因、この縁があったので、それ故にわれ 是其因縁 仮使不」忍 修言尊仏道1 比丘当如)。 報応如 WT.,

力

do // 既知上到11涅槃1 皆得中阿羅漢山 gnas hdir // gnas par dgra bcom thams cad mthon nas $\operatorname{ni}//\operatorname{de}$ yi hog ākhyāmi yathaisa dharma
h//105 $//\,;$ gan gi tshe na khyed cag lugs 会 阿羅漢となれるを見るとき、そこでここにみなを集めて、この法の ままに真実の義を説く (samaye yadā tu sthita atra sthāne, paśyāmi yūyām arahanta sarvān / tato nu sarvān iha saṃnipātya, bhūtârtham tu thams cad ḥdir bsdus te // chos ḥdi ji bshin yan dag don bśad (106) 住:|斯德報: 偶察:|諸賢: 得,至:|羅漢: 汝等一切 乃演:"斯法:)。WT., p. 174, l. 17-l. 20; Pk., 86a6-7. 正蔵・二七a、九四b。 しかしながらなんじらがこの住処に住し、なんじらすべてが 大仙が三乗を説いたのは、 爾乃集::大衆: 為説::真実法、故勧助 諸導師の善巧方便であり、ただ一 皆棄1衆苦1 一切衆

> su yod ma yin // bsti baḥi don du theg pa gñis bstan to // 諸仏方便 rnam hdren rnams kyi thabs la mkhas pa ste // theg pa gcig ste gñis yāna deśitā //106//; drań sroń chen pos theg pa gsum bstan pa// maha-rşī / ekam hi yānam na dvitīyam asti, višrāmaņ
ârtham tu dvi-乗のみあって第二のものはないが、 p., 174, l. 21-p. 175, l. 1; Pk., 86a7-8. 説仏教」大仙救護 は説かれた (upāya-kauśalya vināyakānām, yad yāna deśenti trayo 分別説:三乗1 其乗有」一 未前曾有p二 休雨息爾等, 故分別説)。WT., 唯有::一仏乗: 息処故説」二、諸仏大聖 しかし息処のために二つの乗 善巧方便

ni mya nan mi hdah ste // khyed kyis thams cad mkhyen gyi ye ses ci bhoti // 107 //; dge sron dag gi de phir de rin nas // hdi tsam gyis 当」興川精進 実 phyir // brtson hgrus rlabs chen dam pa skyed par gyis // 今為_汝説; mam udāram / sarvajna-jnānasya kṛtena yūyam, naitāvatā nirvṛti kā WT., p. 175, l. 2-l. 5; 86a8-86b1. りせんこ (tato vadāmī aham adya bhikṣavo, janetha vīryaṃ para= のために最勝・広大な精進を生ずべし、いままでのは決して涅槃 (107) 汝所、得非、滅 諸比丘よ、それ故にわれは今や説く、「なんじらは一切智智 第一英妙 為11仏一切智1 当5発11大精進1 由5是教77化 此諸比丘1 諸仁当」志い 一切敏慧! 菩薩典法 無」有前滅度亡。

行菩薩道の根本属性 (行菩薩道の諸要素)

長行・重頌の文面の中より、行菩薩道として根本的属性の度合の

久成の釈尊との関係より見たる菩薩行(その一)(伊藤)

に配列すると、左の如くである。高い内容要素を抽出し照合せしめ秩序化して、更に因果関係の次第

i 長行の①・重頌の⑭・⑯によると、大通智勝如来の在家時における諸子なる十六王子は、梵天王と共に大通智勝如来に法を顕説のは、Gharma prakāśayasva) と勧請 (adhyeṣanā) をなす。

ii ①・⒀によると、大通智勝如来は多種に法を顕説し (prakā-sate dharma bahu-prakāram) 三転十二行相の法輪を転じ (=四諦を広説し)、縁起 (=十二因縁法) の流転・還滅を広説する (=一切の存在は

iii ②・冏によると、十六王子は信(śraddhā)をもって出家し沙弥となって多仏のもとで行を修め(caritāvin)無上正等覚を志願する(arthin ... anuttarāyāḥ samyak-saṃbodheḥ)。

無上の法を顕説したまえ prakāśayā...agra-dharmam)」と請う。無上の法を顕説したまえ prakāśayā...agra-dharmam)」と請う。無上の法を顕説したまえ prakāśayā...agra-dharmam)」と請う。

V ④によると、如来は沙弥の深心 (adhyāśaya) を知って、菩薩への教授にして諸仏の摂持するものである大乗経の妙法蓮華と名ける法門(大乗経・名妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念) を広く顕説する (vistareṇa sam-pra-v/kāś-aya)。

すなわちሬ・ਿは というない すなわちሬ・ਿ というない はい というない なるこの妙法蓮華を説く。 すなわちሬ・ਿのでは、多種の偈頌をもって①大方等の経(vaipu-ranto vidu-bodhisattvāḥ)、多種の偈頌をもって①大方等の経(vaipu-lya-sūtra)なるこの妙法蓮華を説く。

* 闘ないし闘偈によると、①は経(sūtra)、②は寂静にして無漏なるこれは順次に教法・証法・修行法であって、いわゆる妙法の三義であこれは順次に教法・証法・修行法であって、いわゆる妙法の三義である。

vī ⑤によると、妙法蓮華の法門を信解(adhi-√muc 信受) する。得する(bhagavato bhāṣitaṃ ... ud-√grah √dhṛ ā-√rādh pary-√āp)、 ⑥によると、十六沙弥は世尊の所説を摂持し保持し取得し証

Ⅶ ⑥によると、如来は十六沙弥に無上正等覚において授記する

◎・㈱によると、如来に南無して (tathāgataṃ namas-kṛ-tya)、この妙法蓮華の法門 (saddharma-puṇḍarīka dharma-paryāya)を四衆のために広説 (vistareṇa ... saṃ-pra-√kāś) して聞かしめ、六百万億那由他恒河沙に等しい生類を無上正等覚に成熟せしめる、(すなわち) 勧発し勇悦せしめ教励し歓喜せしめ趣入せしめ (anuttarāyāṃ saṃyak-saṃbodhau pari-√pac saṃ-ā-√dā-paya saṃ-√kṛś saṃ-ut-√tij saṃ-pra-√kṛṣ ava-√tṛ) て引導する (vi-√nī)。

®によると、希有・未曾有を得、般若を具え、諸仏に近侍し行を修め(cīrṇa-carita)仏智に近侍し(buddha-jñāna-paryupāsika)仏智を受持し(-pratigrāhaka)仏智に近侍し(bwddha-jñāna-paryupāsika)仏智を顕示する(-saṃdarśaka)。

⑩によると、沙弥なる菩薩摩訶薩は世尊の教において妙法蓮華の短いとなると、沙弥なる菩薩摩訶薩は世尊の教において妙法蓮華のなり、出家 (anu-pra-√vraj) せしめ随観 (anu-√paś) せしめ聞法 (dharmam √śru) せしめる。

⑪によると、世尊の教において (bhagavataḥ śāsane) 沙弥なる法

久成の釈尊との関係より見たる菩薩行 (その一) (伊藤)

ではar anuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhi-saṃ-√budh)。 はavām sahāyāṃ loka-dhā-の娑婆世界にて無上正等覚を現等覚する (asyāṃ sahāyāṃ loka-dhā-dira anuttarāṃ saṃyak-saṃbodhim abhi-saṃ-√budh)。

めの次第 慧,得」聞,是経,)。 生して如来智を希求し、この所作(=諸如来の般涅槃が唯一であるとい もって遊行する (aham anyāsu loka-dhātusu anyonyair nāma-dheyair samyak-saṃbodhau)。われ釈迦尼牟仏は諸他の世界に諸種の名称を られ、無上正等覚に成熟せしめられる (paripācyanta evânuttarāyāṃ 無上の菩提 (agra-bodhi) に導 (√nī) かれ、 阿羅漢となれるとき、 nam paryeşamānas tatra... etāṃ kriyāṃ śroṣyanti 於#彼土|求#仏智 うこと?是経)を聴聞するであろう (tatra... utpatsyate tathāgata-jñā= vikarāmi)が、自らを菩薩なりと随覚しない衆生もまた、そこに受 rmaḥ 説''真実法」)、菩薩行を聴聞 (bodhisattva-caryāṃ √śru) せしめ 今日もまた声聞地に住するも、ここでも方便をもって (upāyen'iha) anuśrāvitāni) 聞法し世尊の教において無上正等覚に勧発せしめられ 去 (pūrva) に一切智性の法を随聞せしめられ (sarvajāatā-dharmam この法のままに真実義を説かれ (bhūtārtham ā-√khyā yathaişa dha= (bhagavataḥ śāsane...samādāpitāny anuttarāyāṃs amyak-saṃbodhau) Х (12) • (90) (ānupūrvy anuttarāyāḥ samyak-sambodher abhisambodha-(91) これが衆生をして無上正等覚を現等覚せしめるた ・(105)によると、衆生は菩薩としてのわれより、

四四

nāya) である。

xi ⑬によると、何故かというに、如来智は信解し難いものだか

- (国・回・(10)によると、息処 (viśrāmaṇa) のために二つの乗は説かれたのである。説法を成ずるためのもの(dharma-deśanā'bhinirhāra)、三乗を顕説する(trīṇi yānāṇi saṃprakāśayanti) ことが、諸如来の善ご乗を顕記する(trīṇi yāṇāṇi saṃprakāśayanti) ことが、諸如来の善
- ⑮・伽によると、諸比丘よ、汝等は如来智を観察し伺察せよ (ta-のために最勝・広大な精進者を起すべし (janetha vīryaṃ paramaṃudāram)。
- (1) 拙論「華厳思想と法華思想」(『法華経の思想と基盤』所収二六七頁) 参照。

巨 行菩薩道の基本構造

つ問題点を追究して、その基本構造を判明ならしめよう。次に以上を行菩薩道とは何かという観点より要約的に整理し、か

行 (caryā vipulā viśiṣṭā) と総称されている。この総称の用語を鳩摩ための菩薩行 (bodhisattva-caryā) は、区によると、広大・殊勝なる1 釈迦牟尼と名ける如来の娑婆世界で無上正等覚を現等覚する

羅什の妙法華が行仏道とシナ訳して如来寿量品での本行菩薩道という訳語と対照せしめているのは示唆的である。仏道とは仏になる道として菩薩の行ずる所の道という意味であろう。 それはまたVによると、賢明なる菩薩が行ずるための真実の行 (bhūtā cari... yathā caranto vidu-bodhisattvāḥ 真実法菩薩所行道) である。

う菩薩名が釈尊の菩薩行を表示したものであることを示唆する。いう成語の語義に等しく密接に観念連合する。この事実は上行とい四菩薩の第一である菩薩の名称、上行(viślṣṭa-cāritra 殊勝なる行)と四菩薩の第一である菩薩の名称、上行(viślṣṭa-cāritra 殊勝なる行)という成語の語義が、従地

II この広大・殊勝なる(菩薩)行の前提は、i・iiによると、如来に法の顕説を勧請して、多種の法の顕説、四諦・十二因縁の広説を聴聞し、iiによると、信(śraddhā)をもって出家し(沙弥となっ)て行を修め、無上正等覚を志願する(arthin... anuttarāyāh samyak-saṃbodheḥ)ことである。

(agra-dharma)を顕説したまえ」と勧請し、Vによると、如来が妙法深心 (adhyāśaya)をもって如来に、「無上正等覚に関して無上の法の者見を志願する (tathāgata-jñāna-darśanena arthin)という

のを聴聞することである。 蓮華経と名ける法門を広く顕説する(vistarena sam-pra-√kāś-aya-)

▼ 行菩薩道の内容は、先ずWによると、妙法蓮華の法門を信解

証得することである。

この中、世尊の所説(bhāṣita)である妙法蓮華の法門 (Saddharma-puṇḍarīka dharma-paryāya) とは、具体的にはVによると、「最上なる無上の菩提」を説き「菩薩が行ずるための真実の行」を示し「大法・修行法・教法の、いわゆる妙法の三義を所具として総持するものであると解されよう。

またそれを主体的対象とする精神作用である信解 (adhi-Vmuc) は、妙法華には信受とも訳されている。「摂持ないし証得する」は受持・風誦・通利と訳されている。このことから「信解し受持する (ud-Vgrah, Vdhr)」ということに重点があるとも、また信解は摂持ないし証得 (pary-Vāp) を別相 (upāṅga) とする、その総相 (aṅga) であるとも、推求せられよう。ここで妙法華が adhi-Vmuc を信解の外るとも、推求せられよう。ここで妙法華が adhi-Vmuc を信解の外に信受の訳語をもってしたのは、別相の特質を含意せしめてのことであろう。

欠くが、正法華には其仏授;決当,得#無上正真之道4と見える。・受持は授記作仏の根本条件であると知られる。これは妙法蓮華にするものは如来によって無上正等覚について授記される。故に信解するのは如来によって無上正等覚について授記される。故に信解する。 道によると、この法門に対する信・受の段階で、その信・受

N その信・受は、次に端によると、如来に南無して(tathāgataṃnamas-Vkṛ-tya)妙法蓮華の法門を四衆のために広説する(vistareṇaいう語句はシナ訳の妙・正にもチベット訳にも欠く。要するに、これは「法門に対する信受」が「如来に対する南無」と換言して示されは「法門に対する信受」が「如来に対する南無して(tathāgataṃれたことを示唆する。

顕説する (punaḥ-punaḥ saṃ-pra-√kāś) のである。 顕説する (punaḥ-punaḥ saṃ-pra-√kāś) のである。 顕説する (punaḥ-punaḥ saṃ-pra-√kāś) のである。

家・随観・開信せしめ、または勇悦せしめ教励し歓喜せしめ趣入せvat 智慧明了) 諸仏に近侍し(行を修め cīrṇa-carita 常刊修梵行1)仏智に逝入し仏智を顕示するもの (-saṃdarśaka) となり、化他としてはに趣入し仏智を顕示するもの (-saṃdarśaka) となり、化他としてはのである。(-saṃdarśaka) となり、化他としてはない。 (希有・未曾有を得て) 般若を具え(prajnā-vat 智慧明了) 諸仏に近侍し(行を修め cīrṇa-carita 常刊修梵行1)仏智に越入し仏智を顕示するもの (-saṃdarśaka) となり、化他としては、(本有・未曾有を得て) 般若を具え(prajnā-vat 智慧明了) 諸仏に近侍し(行を修め cīrṇa-carita 常刊修梵行1)仏智に越入し仏智を関示する。

法華文化研究 (第十七号)

pari-√pac) ためである。

以子の果徳である。

「なおち行菩薩道を因行と見ると、成正覚の、一方菩薩道を見足する(√car)ことによって、この娑婆世界においる。すなわち行菩薩道を関行と見ると、成正覚の一方菩薩道を具足する(√car)ことによって、この娑婆世界において、かくして、以上の行言仏道」(caryā... vipulā višiṣtā)

便(=三乗を顕説すること)をもって導いて阿羅漢となせるとき、この娑婆世界において今日なお声聞地に住するところの衆生を、善巧方法を随聞(sarvajnatā-dharmam anu-√śru)せしめ勧発せしめ、この法を随聞(sarvajnatā-dharmam anu-√śru)せしめ勧発せしめ、この法を随間(sarvajnatā-dharmam anu-√śru)せしめ勧発せしめ、この法を随間(sarvajnatā-dharmam anu-√śru)

法のままに真実の義(真実法)を説いて (bhūtārtham ā-Vkhyā ya-thā;a dharmah, chos hdi ji bshin yan dag don par bśad do)、無上正等覚に成熟せしめる (paripācyanta evânuttarāyāṃ samyak-saṃbo-dhau)。それでもなお (自らを) 菩薩なりと随覚しえない衆生は、これを他の世界に受生せしめて如来智を希求せしめ、この所作 (是経)を聴聞せしめる。これが衆生をして成正覚せしめるための次第 (ān-wpūrvy... abhisaṃbodhanāya) である。

とは妙法ないし妙法蓮華の法門の含意する真実義を表示する。rma-puṇḍarīka dharma-paryāya を指称し、真実の義 (bhūtārtha)この中、この法 (eṣa dharma) とは Saddharma ないし Saddha=

しからば bhūtârtha の厳密なる意味は如何というに、如来神力 品の第一二偈に同語が強調的に明示されているので、それに同義と 見るべきであろう。同偈は saṃdhā-bhāṣya (随宜所説意趣) の釈名 見るべきであろう。同偈は saṃdhā-bhāṣya (随宜所説意趣) の釈名 見るべきであろう。同偈は saṃdhā) である、諸経の anusaṃdhi (因縁・次第・所帰) すなわち諸経の真実の義を (sūtrāṇa... bhūtam artham) 常に知る」と要約できる。そして随宜所説の意趣である真 実義 (bhūta artha) の意味するところは、一つには (方便品で示される) 声聞が菩薩となって成仏することを可能せしめる聞信の主体 れる) 声聞が菩薩となって成仏することを可能せしめる聞信の主体 れる) 声聞が菩薩となって成仏することを可能せしめる聞信の主体 (寿量品・分別功徳品で示される) 善男子・善女人・菩薩が成仏することを可能せしめる識別・信解の主体的対象となる如来の寿命無量 (aparimitāyuṣ-pramāṇa) であって、Saddharma の含意する一乗・久成を指称すると理解せざるをえないことも、巳に言及したところである。しかも同傷によると、般若の発動をもって「bhūta arthaを常に知る(sadā prajāneti)」のは、有智なる上行等の菩薩であるから、この語 bhūtārtha を媒介として化城喩品が上行 (viśiṣṭa-cāri-tra) に連絡していることを知る。要するに、釈尊の随宜所説の意趣tra) に連絡していることを知る。要するに、釈尊の随宜所説の意趣なる真実義を般若をもって常に知るのは、上行等の菩薩なのである。また衆生をして成正覚せしめるための次第 (ānupūrvī) とは、勧発しなも種・熟・脱の三益に照合する。

N Xiによると、「如来智を観察し伺察し(近点於仏慧1当1観察籌」、 Niによると、「如来智を観察し伺察し(近点於仏慧1当1観察籌」、 Niによると、「如来智を観察し伺察し(近点於仏慧1当1観察籌

A成の釈尊との関係より見たる菩薩行(その一)(伊藤)上正等覚に勧発し成熟せしめ、今日、この娑婆世界にて成熟せしめ、年、公の娑婆世界にて成熟せしめ、本のなお釈迦牟尼仏が沙弥・法師・菩薩として過去において、無

(-ṣaṣṭi-Gaṅgā-nadī-vālukā-samāni prāṇi (or sattva)-koṭi-nayuta-śata-sahasrāni 六百万億那由他恒河沙等衆生)とされる。これに対して従地涌出品で、この娑婆世界に釈尊滅後に、妙法蓮華の法門を護持・宣説・顕説する上行等を上首とする所化も、およびその一一の眷属も、六万恒河沙に等しい菩薩(ṣaṣṭi-Gaṅgā-nadī-vālukā-samāni or upamāni bodhisattva-sahasrāṇi 六万恒河沙等菩薩摩訶薩)とされる。前者は後者に対して六を共通数として、しかも後者の百億那由他分の一である点において、前提となる何等かの関係ありとして、考察の要があるであろう。

第三十九巻第一号所収)参照。 第三十九巻第一号所収)参照。 第三十九巻第一号所収)参照。

(2) 同上。

四 十地と若干の対照

Ⅱの中、「無上正等覚を志願する」とは、十地経で初地に住する

法華文化研究(第十七号)

段階に相当すると考えられる。 段階に相当すると考えられる。

■の中、「如来の智見を志願する」云々というのは、十地の次第では如来智を希求(abhilāṣa)して志願の満足されることのない」(タニ)とか、「殊勝を希求する勤行(viseṣa-parimārgaṇâbhiyoga)を捨てないので、声聞・独覚の地を超過し」云々(ḡ)とか説かれるのに照合する。 また「妙法蓮華と名ける法門の広説を聴聞する」というのは、第八地の「本願力の任持に住する(pūrva-praṇidhāna-bal'ādhāna-sthita)から諸仏世尊より如来智による(または如来の)教授を(tathā-gata-jñānôpasaṃhāra)を受ける、すなわち如来によって智を成就する業(jñānābhinirhāra-karman)を教授される」とある(ḡ)のに照合する。「智を成就する業」とは、妙法の三義の中、修行法にあたる。如来智は証法、教授は教法にあたる。かくて■の段階は第七地に相当する。

無礙智の「智光(=法身)の行輪に対する信解(~jñāna-prabhā-ca-Nの中、信・受とは、十地では第九地に説く四無礙智の中、弁才

勝なる精勤(upāya-prajnā-jnānâbhinirhṛta mārgântar'ārambha-viśeṣa)

第七地に「方便・般若の智によって成就された他の道の殊

とあり、

を成就する」(Al)とあるのに照合する。「…仏智を受持する」とい

住 (prajnā-pāramitā-vihāra)が如来智の光輝によって現前する」(g)

また自行の方面の「般若を具える」というのは、第六地に「…無

ryā-maṇḍalādhimukti) をもって法を説く」(点)というのに照合する。また同地の「智の光輝(jñānāvabhāsa)を受持する(pragrahaṇa)という作意(manasi-kāra)を勤修する」(元)という<法師自在成就>を可能ならしめる「受持(grahaṇa)」の内容に照合する。のは他dha-gocarānupraviṣṭa)」(元)云々とあるのに照合する。故に妙法蓮華の法門の信・受と、それによる無上正等覚の授記と故に妙法蓮華の法門の信・受と、それによる仏の行境に入るにか法連筆の法門の信・受と、それによる仏の行境に入ることを故に妙法蓮華の法門の信・受と、それによる仏の行境に入ることをは、如来の智光の信解・受持と、それによる仏の行境に入ることをは、如来の智光の信解・受持と、それによる仏の行境に入ることをは、如来の智光の信解・受持と、それによる仏の行境に入ることをは、如来の智光の信解・受持と、それによる仏の行境に入ることをは、如来の智光の信解・受持と、それによる仏の行境に入ることをは、如来の智光の信解・受持と、それによる仏の行境に入ることをは、如来の智光の信解・受持と、それによる仏の行境に入ることをは、如来の智光の信解・受持と、それによる仏の行境に入ることをは、如来の智光の信解・受持と、それによる仏の行境に入ることを

Nでの「法師となる」・「妙法蓮華の法門を何度も顕説する」というのは、第九地での「大法師の行分 (mahā-dharma-bhāṇaka-gati)を 真えて、無量智に随行する善巧 (kauśalya) と四無礙智によって成就 された菩薩語 (bodhisattva-vāc) とによって、法を説く」(5.5) 乃至 で説く」(8.5) とあるのに照合する。

行相とする第九地に相当すると考えられる。

うのは第八地のB、第九地のB・Bに照合する。

与える」(B.)とあるのに照合する。 を如実に知って、 それに応じて解脱の教授 (vimokṣōpasaṃhāra)をのまに知って、 それに応じて解脱の教授 (vimokṣōpasaṃhāra)を

において第九地に相当すると看做しうる。かくしてMの段階は前分において第六・七・八地に相当し、主分かくしてMの段階は前分において第六・七・八地に相当し、主分

よく説く」(5)ことに照合する。すなわちこれも第九地に相当する。 破智の第七相の境界とされる、「一乗と諸乗との関係をよく知って 々とあるが、それは十地の中では第九地の大法師の行分である四無 なおⅢの中、「釈迦牟尼仏が…善巧方便(=三乗を顕説すること)を

照合する。

(五) 結論

る。
以上の中、若干のことを要約し、多少のことを附言して結論とす

① 釈尊の因行は caryā vipulā visiṣṭā (行,仏道,=行,菩薩道!)と称する。これは地涌の菩薩の上首の名称 viśiṣṭa-cāritra (上行)と称する。これは地涌の菩薩の上首の名称 viśiṣṭa-cāritra (上行)

久成の釈尊との関係より見たる菩薩行(その一)(伊藤)

- ② 行菩薩道の前提・条件は、無上正等覚を志願する (arthin=合目的々対象とする) 信 (śraddhā)、如来の智見を志願する (tathāgata-lan-darśanena arthin) 深心 (adhyāśaya) である。行菩薩道の根本精神は、妙法蓮華の法門(すなわち教・行・証を具する妙法)に対する聴聞・信解 (adhimukti)・受持 (ud-Vgrah, Vdhr)、すなわち如来に対する南無 (namas-Vkr) である。
- ③ 行菩薩道の実践態度は、仏智を受持するもの(buddha-jnāna-pratigrāhaka)として法門を何度も広く顕説する(saṃ-pra-Vkās)法師の(dharma-bhāṇaka)の活動として明示される。その諸属性は、華厳のの(buddha-jnāna-phāṇaka-gati)に
- ④ 釈尊の因行の菩薩が法師として最終的に説くところの bhū= もartha は、如来神力品において地涌の菩薩たる上行等のみが常に知る(と言明される)ところの随宜所説意趣(一乗・久成)に同義異語である「(諸経の) bhūta artha」と同語である。このことは上異語である「(諸経の) bhūta artha」と同語である。このことは上異語である「(諸経の) bhūta artha」と同語である。
- ⑥ しからば今品における釈尊の因行と果徳との関係は如何。先ことは後者が前者を含意し表示する名称であることを推知せしめる。涌の菩薩の上首の上行と成語・観念・内容の上で密接に関連し、その⑥ かくして今の化城喩品の釈尊の因行としての行菩薩道は、地

今品によると、その展開の次第が明瞭となる。すなわち一般には如来たるもの(ここでは大通智勝如来)は、衆生の意楽(āśaya)を知って四諦十二因縁を説いて無上菩提を志願(arthin)せしめ、その深心(adhyāśaya)を知って妙法蓮華の法門(無上正等覚に関する agradharma)を広説 (vistareṇa saṃ-pra-Vkāś-aya-) し真実の行(bhūta cari=caryā vipulā viśiṣṭā)を示し、教において菩薩・法師(dharma-bhāṇaka)とな(し成仏)せしめる。

広説して衆生を無上正等覚に勧発せしめ (sam-ā-/dā-paya-) 成熟せこれに対して釈尊は過去 (pūrva) に菩薩として妙法蓮華の法門を

この所作 (kriyā 是経、如来法) を聴聞せしめる。

この所作 (kriyā 是経、如来法) を聴聞せしめる。

要するに、過・現・未の三世にわたって衆生をして無上正等覚を思等覚せしめるための次第(ānupūrvī)を有する(anupūrvin)ところに、釈尊の果徳としての実用の特質を見ることができるのである。に、釈尊の果徳としての実用の特質を見ることができるのである。(それを止揚し)て妙法蓮華の法門(真実の義)を広説するにあると知られる。また因行と果徳とは因果の継続をもって、三世にわたって衆生をして勧発(=下種)→成熟→成正覚(=解脱)せしめるためのて衆生をして勧発(=下種)→成熟→成正覚(=解脱)せしめるためのて衆生をして勧発(=下種)→成熟→成正覚(=解脱)せしめるためので、第(ānupūrvī… abhisaṃbodhanāya 仏道に漸入するための法)を全う

(1) 拙論「法華経の仏性論」(渡辺宝陽編『法華仏教の仏陀論と衆生論』所収)

する関係にあるとも知られるであろう。

(主) 対論「法華経における仏性の実用について」(中村瑞隆博士古稀記念『仏教